

# 第1章

## オランダに移住した インドネシア華人の ライフヒストリー

インドネシア独立から9・30事件を経て

**Life History of Chinese Indonesians in the Netherlands:**

From the Indonesian Independence to the September 30<sup>th</sup> Movement

**KITAMURA Yumi**

The purpose of this chapter is to reconstruct the social and political condition of Indonesia after the World War II through the examination of life history of five Chinese Indonesians who migrated to the Netherlands. While the Netherlands today is known as a country of immigrants where approximately 22 percent of the entire population are immigrants or their descendants, Chinese Indonesians and their descendants are very small minority among different immigrant groups. However, due to the relatively long history of immigration of Chinese Indonesians since the beginning of the 20<sup>th</sup> century as well as the unique political position of them in Indonesia, the review of individual lives of Chinese Indonesian migrants bring insights to the decolonization process and the Cold War period in Indonesia.

# オランダに移住した インドネシア華人のライフストーリー

## インドネシア独立から9・30事件を経て

北村 由美

### 1 はじめに

オランダは移民社会で知られている。旧植民地であるインドネシア出身者を含め、総人口約1,683万人のうち、約22%がオランダ以外の国や地域に起源を持つ人々で構成されている。移民とその子孫の内訳をみると、アジア系約77万5,000人のうち、圧倒的に多いのはインドネシア系の約37万人で、統計上はインドネシア華人とその子孫も含まれる<sup>1)</sup>。インドネシア華人とその子孫は、推計によると約1万8,000人にすぎないが[Rijkschroeff et al. 2010: 155]、その移動の歴史は現在のインドネシアがオランダの植民地であった20世紀初頭にさかのぼることができる。

本章では、1945年から1960年代後半のインドネシアの脱植民地化の過程を、オランダへ移住したインドネシア華人のライフストーリーを通して再検討する。第二次世界大戦、独立戦争、9・30事件という劇的な国内情勢の転換を経験する中、旧植民地宗主国であるオランダに移住したインドネシア華人のライフストーリーは、個々人の語りの中に、時代の影を色濃く反映している。

具体的には、2011年と2013年に行った20人のオランダ在住のインドネシア華人へのインタビューから、特に深く話を聞くことができた5人のライフストーリーを紹介する。これらのライフストーリーは、筆者が2編の論文で、それぞれの主旨に即して断片的に引用している[2014; 2016]。一方で本章では、個人史から歴史をひもとくことを主眼としているため、個々人のライフストーリーを可能な限り再現している。

なお、インフォーマントの半数は、インドネシア華人が多く住んでいるアムステルヴェーンに在住していた(図1-1参照)。アムステルヴェーンは、首都アムステルダムと国際空港があるスキポールに隣接しており、日系企業が多いこと

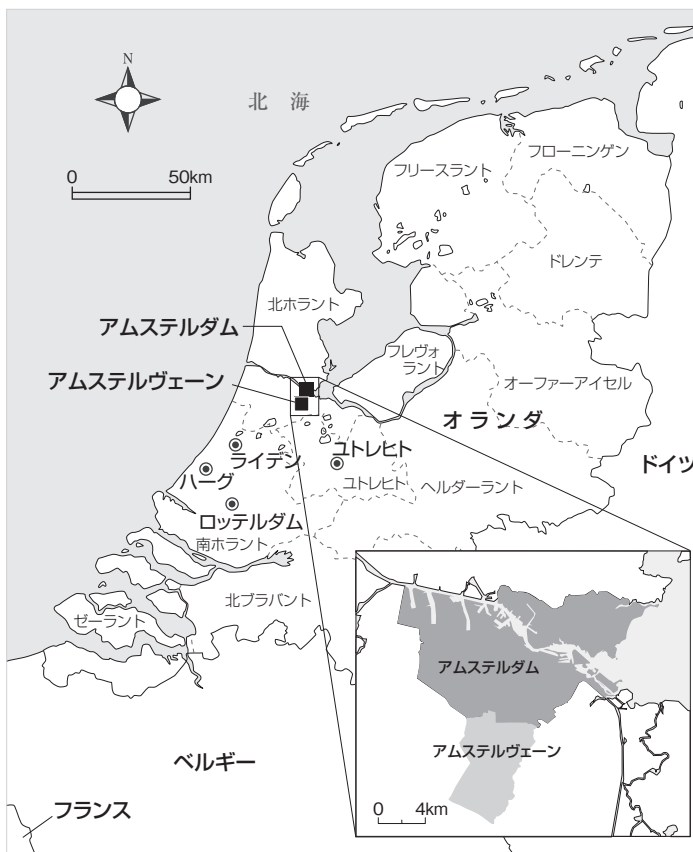


図1-1 アムステルヴェーン地図

でも知られている。2016年現在、同市の人口は約8万8,000人だが、うち外国籍者は日本人約1,500人を含む約1万4,000人である<sup>2)</sup>。

## 2 歴史的背景

本論に入る前に、補足的にオランダ植民地時代について述べた上で、インドネシア華人のオランダへの移動について先行研究を参考に簡単に整理しておく。

オランダが初めて現在のインドネシアの領域内のジャワ島に貿易の拠点を置いたのは、1598年のことである。そして1602年、オランダは、東方貿易を一元

化するために東インド会社を設立した。その上で同社は、1619年にバタヴィア(現在のジャカルタ)に本拠地を設置すると、徐々に支配を拡大していった。18世紀末に同社が解散した後には、オランダ本国が植民地経営を行い、20世紀初頭には、現在のインドネシア全域を蘭領東インドとして面的に支配するにいたった。

オランダが東インド会社を中心として、アジアでの基盤を形成していくのと同時期にあたる1621年、オランダ西インド会社が設立された。西インド会社は、ギアナとアンティル諸島に商館をおき、交易の拠点とした。さらに、1654年までブラジルの一部を統治し、サトウキビ・プランテーションを展開し、その労働者不足を補うために、アフリカ西岸から奴隷を輸入した。この奴隷貿易は、1863年まで続いた。

このような長い支配の歴史の中で、蘭領東インドでオランダ植民地政庁が原住民のためのオランダ語教育の整備をはじめたのは、1848年以降のことである[戸田1976: 58-59]。さらに紆余曲折を経た後、初等教育から高等教育までオランダ語による学習が可能になったのは、ようやく第一次世界大戦後の1920年代であった[戸田1976: 81]。1920年にバンドン工科大学が、1924年にバタヴィア法科大学が、さらに1927年にバタヴィア医科大学が設立された[戸田1976: 81]。これらの高等教育機関が整備されたとはいえ、蘭領東インド内や、オランダ本国への留学によってオランダ語で高等教育まで受けることができたのは、ごく一部のエリートにすぎない。

さらに華人の場合は、1908年に華人向けのオランダ語学校(Hollandsche Chinese School: HCS)が開校するまでは、オランダ語教育へのアクセスが極端に限られていた。1854年に成立した統治法に基づき、オランダ植民地政庁は、人種ごとに管理する方針を定めたため、華人は原住民ともヨーロッパ人とも違う第3のカテゴリーである「外来東洋人」に区分されていた[貞好2016: 43-45]。そのような中、原住民を主な対象としたミッション系の学校に通い、学年が進むにつれオランダ語で学ぶ者や、ごく少数ではあったがヨーロッパ人向けの学校に通うことを許された者もいたが、狭き門であった[Govaars 2005: 39-45, 69-71]。1908年のHCSの成立により、植民地社会における社会的地位の上昇をめざして多くの華人子弟がHCSに入学し、1930年代には、全人口の約2パーセントにしかすぎなかった華人のうち、約10パーセントがオランダ語能力を身に着け、原住民のオランダ語話者数を凌駕するまでとなった[Lohanda 2002: 76]。

このような社会的状況の中、蘭領東インドからオランダへわたった華人のグループの最初の波は、植民地社会での社会的地位の上昇を目指してオランダの高等教育機関に進学した留学生らだった [Li 1998; 2013]。これらの初期の留学生によって1911年には学生グループ「Chung Hua Hui (以下「中華会」)」が組織された [Li 1998; 2013]。初期の CHH の活動に関しては、Stutje [2015] が、特に国際関係に焦点をあてて明らかにしている。

第二の波は、1945年から1949年のインドネシア独立戦争期とその直後である [Li 1998; 2013]。オランダ企業で仕事をしていた華人やその家族などを含め、広い意味でオランダへ協力していたと見なされた華人が、オランダへと移動した。この時期は、オランダの植民地統治からインドネシア独立への転換点であったことから、華人に限らず、オランダ人、ユーラシアン(欧亜混血人)、独立戦争時にオランダ側の兵士として戦った東マルク人を含む元蘭領東インド軍 (KNIL) 兵など、30万人以上がインドネシアからオランダへ移動した [Kraak 58: 30]。そして第三の波は、9・30事件である。9・30事件をきっかけにオランダに移住した者や、インド留学することでインドネシアでの混乱を逃れた学生らの中には、華人が多数いた [Li 1998; 2013]。

9・30事件以降にオランダに移動した人々にはまた、中華人民共和国や旧ソビエト連邦、ベトナムといった旧社会主義国への留学生や外交官らも含まれていた。特に多かったのは、中華人民共和国へ進学した学生で、ソビエト連邦への留学生が続いた [Hill 2010: 28]。多くの留学生は、反共に転じた祖国に、社会主義国から帰国することで肅正されることを恐れ、無国籍者となる道を選んだ [Hill 2010: 31-32]。その結果、これらの元留学生や元外交官らのうち約500人が亡命したとされるが、現在はその半数に減り、大半がオランダ在住だと考えられている [Hill 2010: 38]。

このように、インドネシア華人がオランダに移住した理由としては、旧植民地宗主国への高等教育機関留学にはじまり、第二次世界大戦後は政治的な要因も加わった。その結果、第二次世界大戦後の移住者には、留学生以外の移住も多く含まれている。このようなオランダにおけるインドネシア華人に対するイメージは、高学歴でオランダ語に不自由せず、医師や薬剤師、研究者といった専門性の高い職種についている問題の少ない移民グループであるというものだ。エリート層をしめるインドネシア華人は、「プラナカン<sup>3)</sup>」という民族カテゴリーで表

現され、元留学生らが退職後につくったプラナカン団体などを通じて交流を続けている<sup>4)</sup>。一方で、9・30事件の影響を受けてオランダにたどり着いた、政治亡命者の場合は、独自のグループを形成しており、必ずしもプラナカンとの交流は多くない。これら二つのグループ間の断絶は、おそらく亡命者にとっては同じインドネシア出身者という気安さよりも、故郷を離れて長くたつてはいてもインドネシアとのつながりを保っているプラナカングループへの警戒の方が先立ったためではないだろうか。また、経験の違い、オランダ語能力の違い、ひいてはオランダにおける所属する社会階層の違いという問題もあっただろう。

次節以降、ライフヒストリーを紐解きながら、第二次世界大戦から9・30事件にかけてのインドネシアの国内・国外情勢を個々人の語りから再現していきたい。

### 3 第二次世界大戦から独立戦争の転換点における移動 —— Aさん夫妻の場合

#### 3.1. Aさんご夫妻について

Aさんは、ライデン大学が所蔵する「バタヴィア公館資料」の整理にボランティアで関わられていたことから、同資料を管理している研究者より紹介された。インタビューは、2011年の2月から3月にかけて、デン・ハーグのご自宅で数回にわたって行った。毎回、ご夫人同席で、主に英語で行った。うち一回は、Aさんのインドネシア時代の同級生の未亡人であるCさんも参加してくれた。残念ながら、Aさんは2013年9月に筆者が再訪する直前に、事故で亡くなられた。インタビューの内容は、ご遺族の希望で匿名にて紹介する。

Aさんが関わっておられたバタヴィア公館とは、1619年にオランダが東インド会社の拠点をバタヴィア(現ジャカルタ)においた後、同地の華人管理のために設置した組織で、1660年にはすでに存在していたことが確認されている [Blussé 2003: 1]。オランダ東インド会社が、現地の華人エリートらを役職に任命し、華人社会内での徴税や、冠婚葬祭の取り仕切り、もめ事の仲裁などを行っていた [Blussé 2003: 1]。オランダ東インド会社は、1799年に解散するが、公館はオランダ植民地期も継続し、第二次世界大戦後の1950年代まで活動していた [Blussé 2003: 1-7]。その公館の記録は、1787年から1964年まで残されており、現在はライデン大学に移管されている [吧城華人公館(吧國公堂)檔案叢書編輯委員會

2002: 1-5; Blussé 2003: 1-7]<sup>5)</sup>。

### 3.2. 家族の概要

Aさんは1928年にジャワ島のスマランで生まれた。父はイギリス企業の会計士で、3人兄弟の長子として育った。家庭内ではマレー語（インドネシア語）で生活していたが、華人向けのオランダ語学校に通っていた。中学生の頃に第二次世界大戦が始まり、1942年から1945年は学校が閉鎖されたため、華語学校に通った。戦後はオランダ語学校が復活し、ようやく1947年に卒業し、同年進学のためにオランダに渡航した。デルフト大学へ入学し、化学を専攻した。1960年に卒業し、大学で出会ったBさんと1960年に結婚した。

Aさんの弟は、後にスマランからジャカルタに移り、薬剤師として働いていた。妹は、1979年に5人の子供達をつれて、ロッテルダムに移住し、中華風インドネシア料理店を開店した。妹は2009年に亡くなり、息子が店を継いでいる。Aさんは、妹がなぜ移住をしたのかはよく分からないが、子供達の将来を考えてのことだったのではないかと語っていた。

妻のBさんは、1931年にジャワ島のジョグジャカルタで生まれた。父は有名な眼科医で、1909年にライデン大学に進学し1919年に博士号を取得した。父は、オランダではじめてのインドネシア華人学生団体である「中華会」の創設メンバーの一人であった。母は、ユトレヒト大学に留学し、オランダではじめて法学修士号を取得したインドネシア華人だったが、帰国後は、父の病院の経理を担当していた。両親ともオランダ語で教育を受けたため、自宅での会話もオランダ語だった。Bさんは1949年に両親と姉とともにオランダに移住した<sup>6)</sup>。家族で、ジャカルタの、タンジュン・プリオク港から*William Ruys*号に乗船してロッテルダムに到着した。当時、兄二人がデルフト大学に留学していた。一方、ジョグジャカルタでは、兄の一人が父の病院をついでいた。

### 3.3. 学生時代

Aさんの場合は、兄弟のうちオランダに留学したのはAさんのみで、両親は苦勞して送金してくれた。Aさんは実家からの送金に加えて、ラジオ番組の事務や、学校の運転手、工場勤務など様々なアルバイトをしながら、勉学を続けた。Bさんとは、研究室で知り合った。



ご夫妻が学生時代を過ごした1950年代には、「中華会」に加えて、デルフトの「進会」やライデンの「討論会」、1940年代に「中華会」から分派したアムステルダムの「中山会」など、インドネシア華人の留学生の増加にともなって、各地で学生団体が形成され、団体間の交流が進むようになっていった。「中華会」は1950年代に廃止されるが、他の団体を通して、華人学生らの交流は続いた。

一方で、華人以外のインドネシア人学生の団体とは、特に交流はなかった。華人学生団体は、それぞれの組織の中でスポーツや音楽などグループ分けされており、学生らはそれぞれの希望に応じて参加していた。華人学生団体以外の団体に所属することも多く、Bさんの場合は、女子学生グループで活発に活動していた。

インドネシア人学生団体の方は、政治的な活動も行っていたが、華人学生団体の活動は、学生間の交流を目的としたもので、政治的な色はなかった。ただし、華人学生の友人間で、インドネシアの政治が混乱している状況を見て、インドネシアへ帰国するか、中国へ行くかというようなことを議論することがあったという。友人の中には、大学卒業後に中国へ向かい、文化大革命時代には大変苦労したが、最終的には北京の研究機関で成功した人もいた。

Aさんは、政治的な活動を嫌うというのが、オランダにおけるインドネシア華人の特徴だと話していた。その顕著な例としてAさんは、トルコ系移民や、インドネシアのアンボン諸島出身のマルク系の移民には国会議員もいるが、インドネシア華人はいないことを挙げていた。

### 3.4. 仕事について

Aさんは卒業後、インドネシアへの帰国を考えるが、政治的に不安定な状況だったため、オランダで外資の化学関係企業に就職する。主な仕事の内容は、化学プラントの設計とコンサルタント業務で、結局退職まで32年間勤務した。在職中に、プロジェクト・マネージャーとして台湾に2年間とアメリカのマサチューセッツ州に転勤する機会があり、子供達2人は、アメリカで大きくなった。台湾では、Bさんと夫婦で、中国語を勉強する機会があった。アメリカ転勤の後、Aさん夫妻がオランダに帰国した後も、子供達はアメリカに残り、長男はアメリカ人と結婚した。同僚との関係はよく、退職後も仲間と集まることがあった。

Bさんは、子供が生まれるまで化学関係の学術雑誌のインデックスをする会社に勤めていたが、出産後は家庭に入った。当時のオランダでは、女性ができる

パートタイムの仕事は限られており、やむをえない選択だったという。

### 3.5. インドネシアへの帰国

Aさん夫妻が、はじめてインドネシアへ帰国したのは、1969年のことだった。Aさんの弟の婚約祝いにあわせて、子供たちを連れて家族全員で帰国し、スマラン、バンドゥン、ジョグジャカルタ、ジャカルタを訪問した。この家族旅行では、ロッテルダムからバンコクへ行き、シンガポールを経由して、インドネシアへ帰国した。写真を見せて下さりながら、とてもよい思い出だと語っていた。この家族旅行では、ホームビデオも撮影しており、著者の二度目の訪問の際には、ビデオを一部再生して下さった。その際に同席していたCさんは、インドネシアにはいい思い出がなく、帰りたくないと言っていたのと、Aさんご夫妻の態度が対照的であった。

その後アメリカに転勤したためインドネシアへの帰国は難しく、次に帰国したのは、退職した後2000年に夫妻で、台湾、シンガポール、マレーシア、インドネシアと旅行した際にスマラン、バンドゥン、ジョグジャカルタを訪問した。最後に訪問したのは2003年で、その際はジャカルタに行っただけだった。

### 3.6. 退職後の生活

退職後は、ライデン大学の「バタヴィア公館資料」の手伝いをしたり、会社時代の同僚との集まりやプラナカン団体の集まりに出席していた。

### 3.7. Aさんご夫妻のインタビューを終えて

Aさんご夫妻は、初頭・中等教育をオランダ語で受けており、第二次世界大戦後の混乱期に高等教育を受けるにあたって、最善の選択肢としてオランダへ留学したという点では一致しているが、育った家庭環境には違いがあった。20世紀初頭に、植民地からの留学生の先駆けとして両親ともにオランダで高等教育を受け、兄弟姉妹もオランダに留学したBさんの場合は、独立後に家族の半数がオランダに移動したという点では、オランダが蘭領東インドで築いた社会制度に根ざした形でキャリアを形成してきたオランダ植民地期のエリート一家が、オランダ人が本国に帰国するような感覚で移動したといえるだろう。

一方でAさんの場合は、家庭内ではマレー語（インドネシア語）で生活をしてお

り、兄弟でただ一人留学したAさんは、働きながら学業を終えた。興味深いのは、後に妹家族が移住して、レストランを開業した点である。ピーケ [2012] は、インドネシアが独立し、植民地エリートが帰国したことによって、オランダでインドネシア料理が紹介され、中華料理にインドネシア料理メニューを加えた「中華風インドネシア料理」がブームとなった経緯を説明している。オランダの経済成長によって外食が定着していったことや、他のエスニック料理がなかったことも、ブームの要因であったようだ [ピーケ 2012: 569]。これらの「中華風インドネシア料理店」の多くは、インドネシア華人ではなく、香港や浙江省から流入してきた広東人、浙江人が経営する店であっただろうが、Aさんの妹家族のように、そこに商機を見いだしたインドネシア華人もいたであろう。

著者がインタビューしたAさん夫妻のような元留学生のインフォーマントの中には、Cさんのようにインドネシアに対して苦い思いを抱いている人が少なくなかったが、Aさん夫妻の場合は、互いの育った環境の違いとアメリカでの生活が、インドネシアに対する肯定的な感情につながっているようだった。

## 4 オランダ植民地世界間の移動——ニオさんの場合

### 4.1. ニオ (Njo Bien Nio) さんの場合

はじめてニオさんに会ったのは、2011年1月のことである。2011年1月から3月にかけて、筆者はライデン大学の国際アジア研究センター (IIAS) で研究員をしながら、オランダ在住のインドネシア華人のインタビューを行っていた。その際に、筆者に最初に紹介された女性であるメイリン・ティオ (Mei Ling Thio) さんの母にあたるのがニオさんだった。メイリンさんは、オランダ政府の移民政策に関連した仕事をしながら、オランダのプラナカン華人団体の調査や、キュラソーにおける社会調査などの学術研究をすすめており、筆者の研究関心について説明すると、オランダのプラナカン団体の行事や、ニオさんとの食事に毎週のように誘ってくれた。

ニオさんとのインタビューは、このような関係を構築した後に、インドネシアから留学中であった著者の友人のカニス・スヴィアニタ (Khanis Suvianita) と、メイリンさんが同席する中、アムステルヴェーンのニオさんの自宅にて数回にわたって行った。その後、2013年の9月に再会した際に、細かい点について確認を

している。インタビューは主に英語で行われたが、部分的にインドネシア語での会話が混在した。

ニオさんとその家族は、9・30事件をきっかけに、アジアにおけるオランダの旧植民地であるインドネシアから、南米のベネズエラの北岸に位置するオランダ領アンティル諸島内の最大の都市であったキュラソーに移動した後、最終的にオランダの地に移民した<sup>7)</sup>。ニオさんの移動経路については、序章の地図(17ページ)を参照していただきたい。

#### 4.2. インドネシア時代

ニオさんは1928年に、スマトラ島のメダンで生まれた。両親ともオランダ語学校で教育を受けた。お父さんがオランダ人の貿易会社 Handelsvereniging Amsterdam (HVA、オランダ資本の砂糖プランテーション企業)の土木技術者を担当していたことから、独立戦争時の数年を、オランダ人保護キャンプで育った。当時は、オランダ人やオランダへの協力者と見なされると身に危険が及んだため、住居、学校ともにキャンプ内にあった。キャンプに入るためには申請が必要で、ニオさんの家族はキャンプ外の生活において身の危険を感じることも、子供たちがオランダ語学校に通っていることを根拠として申請した。キャンプ内では、他の家族と一軒の家を共有していたということである。当時メダンでは、華人に対する風あたりが強かったが、同じスマトラ島内でもパダンでは、もともと地元の人との関係がよく華人がオランダへの協力者とみなされることはなかったため、ニオさんのおじはパダンに逃れた。

ニオさんには男兄弟二人と姉一人がいたが、男兄弟は二人とも若くして亡くなった。お姉さんは、まだキャンプ内に住んでいた1946年にオランダ人向けの帰国船に乗り、オランダで高等教育を終えて、卒業後はオランダ航空(KLM)で職を得てそのまま定住した。ニオさんは、「姉は私よりずっとオランダ人らしい」という。一方のニオさんは、1950年に22歳で西ジャワ州バンドゥンの薬学系の大学に進学した。

1956年、28歳の時にバンドゥンの大学で知り合った1年上級生のジャワ出身の華人男性と結婚し、メダンに戻った。この頃、インドネシアの高等教育機関における教授言語がオランダ語からインドネシア語に変更される。夫は1年早く入学したことから、オランダ語で大学課程を修了することができたが、ニオさん

はインドネシア語の授業についていくことができず、途中退学となった。日々の生活においてインドネシア語による会話や新聞を読むことに問題はなかったが、大学の授業で教授言語として使用されたインドネシア語は、難しくてよく分からなかったという。

33歳の時に長男が、38歳の時に長女であるメイリンが生まれる。夫は、薬局で働く以外に、華人の友人に頼まれて華人の多い大学で講義をしていた。1966年のある晩、この大学が共産党系であるという理由で、非常勤講師であった夫が警察に連行されるという事件がおこった。ニオさんはすぐにテニス仲間の将校に「うちの夫は政治と関係がないのになぜ捕まったの」と問い合わせたところ、「分からない」という返事だった。しかし、将校に問い合わせたことが良かったのか、夫は同日の間に帰宅することができた。

ニオさんは、夫に大学講師を依頼した友人は、ゴム園で高いポストにあったことから、妬まれて連行され、夫はその煽りを食ったのではないかと考えている。この友人は、その後長い間釈放されることがなく、家族はジョグジャカルタへと移っていった。釈放後、友人夫妻はオランダに移り、ニオさん一家と再会した。

#### 4.3. キュラソーへの移住

この事件をきっかけとして、ニオ夫妻はこれ以上インドネシアに住み続けるのは安全でないと考え、国外での就職先を探し始める。最終的にバンドゥン時代の友人のついで、キュラソーの薬局に就職が決まり、1968年9月に出国する。出国前に知人に家を売ったが、現金の持ち出しができなかったため、家を買った知人のシンガポールのついでを頼ることにした。シンガポール在住のその人に会えば、現金を払うかオランダかキュラソーの銀行口座に送金してくれるということだった。紙切れに書かれたシンガポールの住所だけを持って、シンガポールへ行き訪問したところ、小さい家で下着姿の華人のおじさんが出てきたので驚いた。一家は、シンガポールからアムステルダムへと向かい、アムステルダムのホテルで3日間過ごした後に、キュラソーへと渡った。一家の資産の方は、キュラソー到着後にシンガポールへと銀行口座を知らせ、無事に送金されてきた。

キュラソーでは、インドネシア華人の家族は全部で4家族しかいなかった。キュラソーは、ヨーロッパ人、スリナム人、奴隷で連れてこられた黒人の子孫、ユダヤ人など多くの人種が混ざり合っている社会だった。ユーラシアンも多く、

「インドネシアから来た人々」という名前のサークルを作っていて、その集まりにいくとインドネシアにいるように感じられた。

キュラソーの経済は、シェル社に依存しており、同社の社員の多くは中心部の高級住宅街であるEmmastad地区に住んでいた。ニオさん一家もこの近くのTamanacostraatに住居を構え、ニオさんの子供たちはプロテスタント校に通っていた。この学校では、すべての教材はオランダから送られてきていた。一家の交友関係においては、8割がオランダ人だった。カトリック信者が多いキュラソーにおいて、ニオさんの一家がプロテスタントだったことも、オランダ人の友人が多かった理由であった。

キュラソーで夫は最初の3年間ウィルヘルミーナ薬局で働き、その後13か月オランダのフローニンゲンの高等専門学校に行き、オランダの薬剤師免許を取得した。キュラソーに帰国後は、薬局監査官を経て、シェル社の薬剤師となった。

キュラソーに渡った当初は4人家族だったが、後年、ニオさんの父と夫の姉を呼び寄せる。ニオさんの母はニオさんがまだインドネシアにいる頃に亡くなっており、義姉は離婚をして肩身狭く暮らしていたため呼び寄せた。ニオさんの父は、1970年に69歳でキュラソーに移住し、81歳で亡くなった。キュラソーに行く前にバダヤジャワを訪れ、親族を一通り訪問してから来た。キュラソーでは写真をとったり、親戚に手紙を書いたりして過ごしていた。亡くなるまでインドネシアに帰国することはなかった。

#### 4.4. 国籍の変更

インドネシアを出国した際に使ったインドネシア国籍のパスポートでは、姓はティオだったが、キュラソーに到着後、キュラソーにはインドネシア大使館がないので、ベネズエラの大統領にパスポートを送った際に、インドネシア国内の華人同化政策に準じて、中国名からインドネシア名に変更するよう依頼があった。どのような名前にすればよいのか迷った末、義兄がAdi Sapurotoに名前を変更していたので、同じ名前にした。夫の銀行口座名は、Thio Tji Ingだったが、銀行では氏名変更が難しいといわれ、「Thio Tji Ing 別名 Adi Sapuroto」という扱いになった。一家はオランダの旧植民地出身だったので、5年後にオランダ国籍の申請をすることができた。その際、夫はThio Tji Ingという自分の名前を取り戻したいと主張し、元の名前に戻した。今でもインドネシアの親族でAdi

Sapurotoという名前を使っている人がいる。国籍の変更に際して、ためらいはなかったのかという私達の質問に対して「インドネシアにはもう戻ることはない」と決めていたので、国籍を変更することにためらいはなかった」という話だった。

#### 4.5. オランダへの移動

当時キュラソーでは高等教育機関がなかったため、子供たちの進学を契機としてオランダに移ることになった。アメリカに子弟を送る家庭も多かったが、ニオ一家の場合は長男がAJAX(アムステルダムに本拠地をおくサッカーチーム、アヤックス・アムステルダムの略)のファンでオランダ行きを希望したこともあり、オランダに移住することになった。長男が先に大学に入学し、メイリンもオランダの大学に進学した後、夫はロッテルダムの薬局を購入することに成功する。薬局の所有者になることは夫の以前からの夢であった。1986年にニオ夫妻はキュラソーを後にし、オランダのカベレに移住する。その後1995年にアムステルダムに移り、夫の姉と夫はアムステルダムで亡くなった。家族の写真やニオさん親子の話しぶりから、義姉とニオさんの関係が、実の姉妹よりも近く、互いに思いやりながら家族を支えてきたということが伝わってきた。

筆者は2011年と2013年にニオさんに会った。ニオさんは車イスで移動しており、日々の生活は介護士が順番にシフトを組んで訪問して来てくれるということだった。オランダの進んだ高齢者福祉の恩恵を受けることができるのはありがたいが、気候に関してはインドネシアやキュラソーがいいというような話をしていた。週末には、子どもたちと会ったり、プラナカン団体の活動に行ったりして過ごしていた。日曜日には、インドネシア語とオランダ語のバイリンガルで開催されるインドネシア・キリスト教教会のミサに参加していた。また、スカイプを覚えたため、昔の同級生と連絡をとることも楽しみの一つようだった。

#### 4.6. ニオさんのインタビューを終えて

ニオさん家族の人生は、旧オランダ植民地であったインドネシアとキュラソー、そしてオランダという、植民地世界の連続性の中で選択されてきた。ニオさんの語り口は、運命に翻弄されるというよりは、その時々で家族のために最善を選んできた女性として、静かながら前向きなもので、深く印象に残った。

## 5 東アジアとのつながりを求めて——ミャオリンさんの場合

### 5.1. ミャオリン・チョア(Miao Ling Tjoa)さんの場合

ミャオリンさんは、ライデン大学のインドネシア史の研究者で、ミャオリンさんの元同僚にあたるレオナルド・ブリュッセイ(Leonard Blussé)先生にご紹介いただいた。ブリュッセイ先生は、インドネシア華人史に関して数多くの著作を出版されているが、本研究に関連しては、アニー・タン(Anny Tan)というインドネシア華人女性とその家族へのインタビューにもとづいた家族史である*Retour Amoy*が挙げられる[Blussé 2000]。アニー・タンはオランダ留学後にインドネシアに帰国し、その後中国に渡り、文化大革命を経験した。

ミャオリンさんへのインタビューは、2回彼女の自宅に伺った際に主に日本語で行った。ミャオリンさんは日本語と英語が堪能なため、筆者のメモへの修正・加筆は、ミャオリンさん自身が行った。また、ミャオリンさんの取り計らいで、ドイツにいるお姉さんともスカイプで会話することができた。

残念ながらミャオリンさんは、ご自宅の火事が原因で2015年11月29日に亡くなられた。本稿は、ニューヨーク在住の甥御さんと確認の上、個人名をすべて含めた形で公開する。

### 5.2. インドネシア時代

ミャオリンさんは1942年1月4日、スラウェシ島南スラウェシ州マカッサルの郊外マチニで生まれた。4人兄弟(兄・姉・彼女・弟)であった。祖父は、マカッサルの地主で果樹園・家屋・農地を多数所有しており、裕福な家庭に育った。父は6人兄弟の長男で、1907年6月28日生まれ。長女である姉が生まれた後に3人子供が生まれたが、幼くして亡くなったため、ミャオリンさんは形式上は叔父のジンチョン氏(Tjiong Tjong)の養女となり、マリー(Mary)という西洋風の名前も与えられた。叔父は、祖父がマヨールで、父がカピタンであったトゥン・ジュイン(Thoeng Tjioe Ing)と結婚した。トゥン家はマカッサルでは指折りの裕福な一族だったが、日本占領期に財産の多くを没収された。

ジンチョン氏は戦前ユトレヒト大学で歯学を学び、第二次世界大戦が始まる直前にインドネシアに帰国した。祖父は曾祖父より早く亡くなった。父は(働く必要はなかったが母の意向で)Internatioというオランダの会社で会計をしていた



が、開戦とともに会社がなくなった。その後貿易業を少し行っていたが、ビジネス・パートナーに裏切られた。音楽が趣味で、7種類の楽器を演奏することができた。

母イエン・ツユン(Yen Tzu Yun)は、1901年5月8日、中国の蘇州で生まれた。9人兄弟の末子で、上海で教育を受ける。中国にいる際に一度結婚し、一男一女をもうけたが性格の不一致で離婚した。その後マカッサルに英語教師として赴任した。赴任にあたっては、親族でマヨール(各地の華人社会のリーダーのうち、トップの位階)であるトゥンが、上海で英語教師を探してマカッサルに招聘した。その後、ミャオリンさんの異父姉にあたる中国で生まれた長女もインドネシアに呼び、異父姉は現在もジャカルタに住んでいる。ツユンは結婚後も教育活動に従事し、マカッサルで華語の小学校と中学校の設立に尽力した。さらに、婦人会などでも活動しており、1955年にバンドンで開催されたアジア・アフリカ会議の際には、周恩来と面談する機会があった。

### 5.3. オランダへの移動

ミャオリンさんの兄弟のうち兄と姉は中華学校に通い、父の意向で彼女のみがArendsburgカトリック学校に入学し、オランダ教育を受けた。ミャオリンさんが10歳の時に、教育のために5歳上の姉(Tjoa Siang Tjie)と8歳上の兄(Tjoa Tong Seng)とともにオランダに送られる。1951年5月、姉が一足先に飛行機でオランダに渡航した。姉は当初、インドネシアの知人のお母さんの家に滞在して、両親の送金を待っていたが、実は知人にだまされていたことがわかった。そこで、ハーグにいた父方の親戚と連絡をとり、最終的に、父のいとこと同じ下宿屋に部屋を借りた。姉はアムステルダムの音楽学校で音楽を専攻し、ハーブとピアノを習った。1952年3月に兄とミャオリンさんが船で到着し、子供たち3人の生活がはじまる。兄と姉は、インドネシアでオランダ語学校に通っていなかったため、到着後しばらくは言語面で苦労していたが、彼女は比較的早く修得できた。なお、4人兄弟・姉妹のうち、末子である弟は、インドネシアで育ち、後にガルーダ航空のパイロットになった。

兄は、香港にある英国教会系のDiocesen Boy's School(拔萃男書院)を修了した後、アムステルダムのChristelijk Lyceumで高等学校卒業資格を取得し、アムステルダム自由大学で医学を専攻した。卒業後は、アムステルダムのウィルヘル

ミナ病院をはじめ三つの病院で勤めた後1963年にNYにわたり病院勤務し、香港出身の女性と結婚する。

#### 5.4. 姉夫妻の中国への「帰国」と両親の移住

姉はオランダでジャワ島のプカロンガン出身の華人と知り合い結婚する。夫はアムステルダム自由大学の前身であるヘーンメテ大学で医学を修得し、1957年に姉とともに帰国した。インドネシアに帰国後は、マカッサルで医師として働きながら、大学で講師をしていた。1965年になると反華人の風潮が高まってきたと感じていたところ、義兄が知人から、中国では医者不足のため医者を歓迎しているという情報を得てきた。義兄は中国に全く知人がおらず、ミャオリンさんの父は止めたが、結局1966年3月に3人の子供をつれて姉夫婦は中国へ渡航した。

まず香港に向かい2週間過ごした後、広東に向かった。広東で4か月半仕事が見つかるのを待ったが資金が付き、帰国華僑収容キャンプに移った。キャンプでの生活はひどく、先も見えなかったことから、義兄は再びヨーロッパで仕事を探した。ドイツに住んでいた医者の友人の紹介で、ドイツのケーニヒヒ・スルッター市にある病院に就職した。1966年7月に家族はそこに落ち着いた。義兄は1972年3月26日にジョギング中に44歳で急死した。姉はその後、ピアノを教え続けて生計をたて、現在もケーニヒヒ・スルッター市に居住している。子供たち3人はすでに成人した。

一方インドネシアに残っていた両親は、1968年に、反華人的な社会的風潮を危惧して、インドネシアの財産をそのまま残し、スーツケース二個のみを持って、ドイツの姉の家に移った。1970年に父が旅行中ドイツのマインツで急死した後、母はニューヨークの兄のところに移る。母は1997年に96歳で死去した。

#### 5.5. ライデン大学におけるキャリアと退職後の生活

ミャオリンさん自身は17歳で高校を卒業した後、AFS協会による交換留学制度を活用して、ミネソタ・ミネアポリスの高校に、一年間留学した。60年にライデン大学に入学した。日本語を主専攻、中国語と韓国語を副専攻した。大学卒業後からライデン大学日本語学科の教員になり、2005年に退職した。1966年から1968年まで文部省奨学金で慶應義塾大学に留学した。その際にオランダ国籍を取得。日本では東京のオランダ大使館に居住していた。1968年に日本からオラ

ンダに帰国する際に、初めてインドネシアに帰国した。また、1990年には東京大学の史料編纂所にフェローとして8か月滞在し、特に1763年の朝鮮通信使に関して研究した。

ミャオリンさんは中国人であった母の影響もあり、華人であるという自己意識を強く持っていると言っていた。オランダでの生活が長い、親しい友人の多くはアムステルヴェーンのプラナカン団体、フレンドシップ(De Vriendschap)のメンバーだという。退職後は、フレンドシップの友人らと海外に旅行したり、ライندگانスやカード作りなどの活動を楽しんでいた。また、日本関係の文化イベントにも積極的に参加し、活発に趣味を楽しむ生活だった。

## 5.6. ミャオリンさんのインタビューを終えて

ミャオリンさんに現在のインドネシアについての印象を尋ねたが、両親が財産も持ち出せず逃げ出さざるをえなかった国であるためか、よい印象がないようだった。筆者がインタビューした元留学生は、ミャオリンさんをのぞいてみな大学留学のためにオランダに来ていたが、ミャオリンさんは10歳で渡航して以来、生涯のほとんどをオランダで過ごし、キャリアを重ねた人であった。そのような彼女が、退職後も共に旅行する特に親しい友人の多くが、プラナカン団体に所属するインドネシア華人であるという点が印象的だった。ミャオリンさんにとって、プラナカン団体の友人は、インドネシアでの生活に強い思い入れがあったというよりも、インドネシアから移民してきたという経歴と、オランダ的な価値観の双方を共有できるという点が重要であったように思う。

人生の大半をオランダで過ごし、弟をのぞく家族の構成員は、ニューヨークとドイツへ移住していったミャオリンさんであったが、母が中国人であったことや、父の一族が蘭印時代の華人名士であったことが、彼女が終生東アジアについて研究することになった理由ではないだろうか。ミャオリンさんにとっては、中国もインドネシアも故郷やホームランドといった郷愁を誘う場所ではなく、日本研究を通して東アジアとの関わりを持ち続ける中で、自らのルーツについて考えていたのではないだろうか。

## 6 権威主義体制への抵抗——Liem Soei Liong さんの場合

リムさんには、オランダ在住のインドネシア人ジャーナリストの紹介で会うことができた。リムさんは、スハルト体制下における人権問題に対して、運動を行っていた著名な活動家の一人である<sup>8)</sup>。インタビューはすべてインドネシア語で行った。

### 6.1. インドネシア時代

リムさんは、ジャカルタの高級住宅街であるメンテンで生まれ育った。父は小児科医。メンテンは特に華人が多い地域ではなかったため、子供のころから様々な人々との交友があった。リムさんの一族には、バブルキ(Badan Permusyawaratan Kewarganegaraan Indonesia: Baperki、国籍協商会)を支援する人が多かった。バブルキは、華人がインドネシア社会において適切な位置づけを得られることを目的とした参加型運動であった。特に有名なのは、母方の叔父のゴー・ギンチュワン(Go Gien Tjwan)だ。ゴーは、シャウ・ギョクチャンと(Siauw Giok Tjhan)とともにバブルキの主要メンバーとして活躍した人物で、9・30事件の際にシャウらとともに逮捕されるが、4か月で釈放され、1966年にオランダに渡った後、アムステルダム大学でアジア史の教員となった人物である。

リムさんは、バブルキが設立したレスプブリカ大学(Universitas Respublika)の医学部に入学したが、左翼的傾向が強かったリムさんが9・30事件の影響で逮捕されるのではないかと危惧した両親の勧めで、1966年にドイツに留学する。9・30事件では、レスプブリカ大学は放火され、多くの関係者が逮捕された。

### 6.2. オランダへの移動と反スハルト体制運動

ドイツの大学では化学を専攻し、その後オランダに移る。オランダでは、脳科学の研究センターで仕事をしながら、1968年にアムステルダム大学教授で法学と社会学を専門にしていたウィレム・フレデリック・ウェルトヘイム(Willem Frederik Wertheim)や、ライデン大学のインドネシア研究者ヤン・プルヴィーア(Jan Pluvier)、ゴー・ギンチュワンらによって設立されたインドネシア委員会(Komite Indonesia)で活動を始める。

インドネシア委員会は、スハルト政権に対して異議を唱え、インドネシアへの

援助の廃止や、9・30事件によって逮捕された政治犯の釈放など、さまざまな人権問題へ対処するようマスコミを通して訴えていた。リムさんによると、インドネシア人の多くは、インドネシア委員会に関わることを恐れ、主要な活動メンバーには彼ともうひとりの友人しかいなかったという。リムさんは1974年から1988年まで、インドネシア委員会のニューズレターを担当していた。インドネシア委員会は1998年にスハルト政権が崩壊するまで続き、その後はインドネシア・ハウスと名を変え、インドネシアにおいて民主主義が機能するよう見守ることを目的とする団体へと変化していった。

74年にユダヤ系オランダ人女性の活動家との間に娘が生まれ、娘を連れて初めて帰国した。その後は、娘が成人するまで2年おきにインドネシアに連れて帰ることにした。ただしリムさんは、反スハルト政権の活動を続けていたため、インドネシアに帰国する際にも、連行されたり、入国拒否にあったりと様々なことがあった。リムさんは、インドネシアの民主化に向けての活動は、海外にいるからこそ自身の安全を確保しながら、多くを成し遂げられたと考えていた。外国籍であるため、インドネシアの諜報機関も、彼の扱いに注意を払っていたのだ。

その一例としてリムさんが紹介してくれたエピソードは、戦略諜報庁 (Badan Intelijen Strategis) のオフィスに連行された後、移民局に連れて行かれ、国外追放の手続きを取られた時のことだ。終始、軍の将校らに囲まれ、重々しい雰囲気であったが、翌日の朝、シンガポール行きの飛行機に乗る際に、リムさんにはオランダ式にジャムパンとチーズの朝食を準備してくれたという。リムさんは、「普通の(インドネシア式の)朝ごはんの方が好きなんだけどね」と笑っていた。

80年代の活動によって、リムさんの名は広く知られるようになるが、リムさん自身はこの時代を振り返り、暗く、先の見えない時代だったと語った。スハルト体制反対のキャンペーンをはっても、西側諸国や日本は、一方では人権保護を訴えていたとしても、他方ではスハルトとの経済関係を優先していたため、インドネシアは全く変化していないと感じていた。約30年間活動をしたが、自らの活動の成果はほんの少力で、スハルト体制が崩壊したのも、エジプトのムバラク体制の崩壊と同様、経済問題だったと考えている。とはいえ、活動を続けてきて、唯一良かったと思えるのが、年齢に関係なくインドネシア人の知人らが、「リムさんは海外にいる私達の一人だ(Pak Lim itu orang kita diluar)」と言ってくれたことで、単純に「海外で発言している人」というように見なされなかったことだという。

### 6.3. 現在の生活——スハルト体制崩壊後

スハルト体制が崩壊した後、リムさんはインドネシアとオランダを頻繁に行き来し、レスブブリカ大学の卒業生らと旧交を温めたり、インターネット上で情報交換している。インドネシア国内の政治や華人団体の動向にも詳しい。今の華人の若者に関しては、リムさんの世代のように55年のバンドン会議以降のアジア志向や国際性を強調する教育を受けていないためか、国際感覚に乏しい点が心配だと話していた。

### 6.4. リムさんとのインタビューを終えて

リムさんには、筆者のオランダ滞在中に、ゴー・ギンチュワン氏や、元社会主義国への留学生でオランダに亡命した友人らなど多くの人を紹介して頂いた。リムさんは長く活動家であったため、オランダ人の元活動家や教員の友人も多く、プラナカン団体とは距離をおいていた。スカルノ期のナショナリズムの高まりと、左派知識人らの影響をうけて政治に関心を持ったリムさんにとって、インドネシアへの思いは変わることがなく、留学当時のヨーロッパにおける学生運動の高まりと共鳴する形で、先鋭化していったのではないだろうか。

## 7 まとめ

本稿では、オランダ在住のインドネシア華人5名のインタビューを紹介することで、個々人の語りを通して、第二次世界大戦から9・30事件にいたるまでのインドネシアの体制転換と社会の変化を概観してきた。また、ニオさんのライフストーリーでは、旧植民地間の関係性を、ニオさん家族の移動を通してみていった。5人に共通するのは、本人や家族の高等教育の選択肢としてオランダやその隣国であるドイツが選ばれたという点である。この点に関しては、華人をめぐる植民地時代からの差別的な政策の結果、政治の影響を受けやすい一方で、教育基盤と経済基盤という資本があることによって、オランダへの移民が可能になったといえる。5人の大きな違いは、生まれ育ったインドネシアに対する思いと交友関係であろう。

懐かしく思いながらも住み続けることは難しかったと感じているAさん夫妻とニオさんの場合は、オランダ語教育を文化資産として、オランダで生活するこ

とを選んだ。それぞれ移動の背景は違っていながら、プラナカン協会などを通して、同じような社会層に属するインドネシア華人らとの交友関係を深めるようになった。すごした期間が短い上に、両親の苦労を目の当たりにしたミャオリンさんの場合は、インドネシアに対して否定的なイメージを拭えないことが、そのような経験を共有できるプラナカンの友人関係を深める要因の一つであろう。

また、リムさんの場合は、スカルノ体制下でインドネシアの左傾化が進む中で青年期をすごし、政治への関心を高めていったが、9・30事件以降にスハルトが政権を掌握し反共産主義に転じたことによって、国を後にすることになった。しかしリムさんの場合は、インドネシアに対する希望は変わらなかった。さらに、左派知識人としての政治的立場が、インドネシア人の政治難民やリムさんが留学した当時のヨーロッパの学生運動の動きと呼応していき、出国前に属していたインドネシアの華人を中心とするサークルを大きくこえた人間関係を形成するにいたった。

本文で触れたとおり、インフォーマントの多くは老年期を迎え、本章が形になる前に亡くなった方もおられる。何人かのインフォーマントは、自分の体験を子供に話すことはなかったと語っていたことから、ささやかではあるがここに記録を残すことで、ご協力いただいた皆さんへのお礼としたい。

## 注釈

---

- 1) Statistics Netherlands (CBS)〈URL: <https://www.cbs.nl/en-gb>〉にて、2014年のデータを参照。
- 2) 「Gemeente Amstelveen in Cijfers (数字でみるアムステヴェーン)」サイト参照。〈URL: <http://www.amstelveen.incijfers.nl/>〉(最終アクセス日: 2016年9月15日)
- 3) プラナカン(Peranakan)とは、もともと中国系に限らず、現地人との混血児を指していたが、現在のインドネシアでは混血であるかどうかに関わらず、インドネシア生まれで、中国語ではなくインドネシア諸語で育った華人で、主にジャワ島出身の華人を指す。オランダでは、「プラナカン」という呼称が、中国生まれの華人や華人以外のインドネシア人と自らを差異化する民族区分として、インドネシア華人を指す語である。しかし、北村(2016)で言及した通り、「プラナカン」という自称を好むインドネシア華人は、オランダ語を主要な言語として話す特定の階層のインフォーマントが多く、インドネシ

ア人やインドネシア華人と自称するインフォーマントとは、交友関係の範囲が違っていた。

- 4) プラナカン華人団体には、イニシアティブ協会 (Vereniging Inisiatip、デン・ハーグ、1982年成立)、友人親睦会 (De Vriendenkring Lian Yi Hui、アムステルヴェーン、1985年設立)、フレンドシップ (De Vriendschap、アムステルヴェーン、1989年設立)、華裔協商会 (Hua Yi Xie Shang Hui、ユトレヒト、1987年設立) などがある。
- 5) 公館資料の概要については、Friends of the Kong Koan Archives Foundation のウェブサイトを参照のこと (URL : <http://www.kongkoan.nl/>) (最終アクセス日: 2016年9月15日)
- 6) Bさんの父は1952年に亡くなり、母は1991年に101歳で亡くなった。両親のご遺体は、茶毘に伏した後、灰をジョグジャカルタに送り、現地のお墓に埋葬したが、姉の時は、オランダで遺灰を撒いた。
- 7) キュラソーには、オランダが植民地を展開しはじめた17世紀初頭に、アンティル諸島の拠点として商館がおかれた。1670年から1815年は、オランダの奴隷交易の中心地として、1914年に石油が発掘されて以降は、シェル社による石油精製と輸出によって栄えた。1954年より、オランダ領アンティル諸島の一部となる。オランダ領アンティル諸島は2010年に解体する。
- 8) 日本語で読めるリムさんの著作としては、9・30事件によって、逮捕された後に亡命した活動家のカルメル・ブディアルジョとリムさんの共著である以下の2作が挙げられる。カルメル・ブディアルジョ、リエム・スイ・リオン(1986)『地図から消された東チモール——インドネシアの侵略 続く抵抗』東チモールの独立に連帯する会 (訳)、ありえす書房。カルメル・ブディアルジョ、リエム・スイ・リオン(1995)『インドネシアの先住民族と人権問題——西パプアにみる民族絶滅政策』小野寺和彦 (訳)、明石書店。

## 参考文献

---

### 〈日本語〉

- 貞好康志. 2016. 『華人のインドネシア現代史——はるかな国民統合への道』木犀社。
- 北村由美. 2014. 『「西」への道——オランダにおけるインドネシア出身華人の軌跡』『地域研究』14(2): 219-239.
- 北村由美. 2016. 「オランダ在住『プラナカン』の語りに見られる『華人性』の再検討」津田浩司・櫻田涼子・伏木香織 (編著)『「華人」という描線——行為実践の場からの人類学的アプローチ』風響社, pp.113-141.



- 戸田金一. 1976. 「インドネシア教育史」津田元一郎ほか『東南アジア教育史』講談社.
- カルメル・ブディアルジョ、リム・スイ・リオン. 1986. 『地図から消された東チモール——インドネシアの侵略 続く抵抗』東チモールの独立に連帯する会(訳), ありえず書房.
- カルメル・ブディアルジョ、リム・スイ・リオン. 1995. 『インドネシアの先住民と人権問題——西パプアにみる民族絶滅政策』小野寺和彦(訳), 明石書店.
- ピーク, フランク N. 2012. 「オランダ」リン・パン(編)『世界華人エンサイクロペディア』田口佐紀子, 山本民雄, 佐藤嘉江子(訳), 明石書店, pp. 567-577.

### 〈華語〉

- 包樂史 (Leonard Blussé), 吳鳳斌校注. 2002. 『公案簿 第1輯』厦門大学出版社.

### 〈英語・オランダ語〉

- Blussé, Leonard. 2000. *Retour Amoy*. Amsterdam: Uitgeverij Balans.
- Blussé, Leonard and Chen Menghong (eds). 2003. *The Archives of the Kong Koan of Batavia*. Leiden: Brill.
- Govaars, Ming. 2005. *Dutch Colonial Education: The Chinese Experience in Indonesia, 1900-1942*. Singapore: Chinese Heritage Centre.
- Hill, David T. 2010. “Indonesia s Exiled Left as the Cold War Thaws,” *Review of Indonesian and Malaysian Affairs* 44 (1): 21-51
- Kraak, J. H. 1958. “The Repatriation of the Dutch from Indonesia,” *R.E.M.P Bulletin: Research Group for European Migration Problems* 6 (2): 27-40.
- Li, Minghuan. 1998. “Living Among Three Walls? The Peranakan Chinese in the Netherlands,” In *The Last Half Century of Chinese Overseas*. edited by Elizabeth Sinn. Hong Kong: Hong Kong University Press: 167-184.
- Li, Minghuan. 2013. *Seeing Transnationally: How Chinese Migrants Make Their Dreams Come True*. Leuven: Leuven University Press.
- Lohanda, Mona. 2002. *Growing Pains: The Chinese and the Dutch in Colonial Java, 1890-1942*. Jakarta: Yayasan CiptaLoka Caraka.
- Stutje, Klaas. 2015. “The Complex World of the Chung Hwa Hui,” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde / Journal of the Humanities and Social Sciences of Southeast Asia and Oceania*. 171 (4): 516-542.
- VerlaanToon, Boudie Rijkschroeff, en Paul The Gwan Tjaij. 2010. *Indonesische Chinezen in Nederland*. Amsterdam: SWP.